

「ザ・ファミリー・オブ・マン」展における原子力の表象

土山陽子（早稲田大学）

本発表では、「ザ・ファミリー・オブ・マン（人間家族）」展に表象されている原子力のイメージについて考察する。ニューヨーク近代美術館（MoMA）でエドワード・スタイケン（1879–1973年）によって企画され、1955年に開幕した写真展「人間家族」展は、500点余りの写真によって、核開発の時代における人間の生活の大切さを強調していた。

同展では、キリスト教的な物語—創世記からヨハネの黙示録まで—になぞらえた人間の誕生から破滅の危機を、グラフィジャーナリズムで用いられた「フォト・ストーリー」の手法で、30以上からなるテーマを通して表している。当時、米国による最初の水素爆弾の実験により、核戦争の危機感が高まっていた。その中で、アイゼンハワー大統領が1952年12月の国連総会で提唱した「アトムズ・フォー・ピース」運動は、原子力を平和利用の目的でのみ使用することを訴えた。「人間家族」展に表象された核の言説は、この運動の内容と一致しており、核兵器の脅威とは別に、人間の生活に身近な存在として原子力を紹介している。

この運動の一環として巡回していた「原子力平和利用」展における科学技術の説明の仕方と比較した場合、「人間家族」展が特徴的なのは、1930年代のグラフィック雑誌で培われた「フォト・ストーリー」の手法を用いている点である。特に、展覧会中盤の「労働」のセクションでは、人間が必要としている石炭、天然ガス、石油といったエネルギー源が働く人々の姿で表される。その後新しいエネルギーを基盤にした人々の仕事の風景がフォト・モンタージュによって示されている。このパネルに加えられているウラニウムの原子モデルは、科学写真を専門としていたフリッツ・ゴロー（1901–1986年）撮影によるものであり、1949年に雑誌Lifeに掲載された。この写真は、先行研究で議論されている展覧会終盤の水爆実験のキノコ雲の写真とは対照的である。また、写真の視覚的なインパクトによって直接的に働きかけるばかりではなく、文学テキストとの組み合わせを用いて、鑑賞者の想像力によって核の存在を理解させようとしている。

ニューヨーク展（1955年）、パリ展（1956年）、東京展（1956年）を比較した場合、パリ市立近代美術館で展示されたヨーロッパ巡回版にのみ、「労働」のセクションのパネルに原子力発電所で働く人の写真が加えられていることがわかる。また、ウラニウムの原子モデルや原子炉の写真は、同展のカタログには加えられていない。ヨーロッパ巡回展が復元されているルクセンブルクの「人間家族」展美術館では、この2点の写真が確認できる。2003年にユネスコの「世界の記憶」に登録された同展の復元が1950年代の政治や文化を顧みる場を与えるとともに、環境問題が人間の存続に関わるようになった現代では、それらがかつての価値観であることも明らかにしている。